池上線

作詞…佐藤順英
作曲…西島三重子

古い電車のドアのそば
二人は黙って立っていた
話す言葉をさがしながら
すきま風に震えて
いくつ駅を過ぎたのか
忘れてあなたに聞いたのに
じっと私を見つめながら
ごめんねなんて言ったわ

泣いてはダメだと
胸にきかせて
白いハンカチを
握りしめたの

池上線が走る町に
あなたは二度と来ないのね
池上線に揺られながら
今日も帰る私なの

終電時刻を確かめて
あなたは私と駅を出た
角のフルーツショップだけが
灯りともす夜更けに
商店街を通り抜け
踏切渡った時だったわね
待ってますとつぶやいたら
突然抱いてくれたわ

あとからあとから
涙あふれて
後ろ姿さえ見えなかったの

哀愁歌「池上線」のあれこれ

1975年にLPの1曲として発売された「池上線」は、西島三重子を皮切りに森昌子、高山厳など十数人に歌われ続け、80万枚を売り上げたヒット曲である。歌詞に込められた思い、ちょっと知りたいですよね。ということで、作詞家・佐藤順英さんへインタビュー。

―― 歌詞についてお聞かせください。

佐藤 大学1年生のときの歌です。僕は成城学園に住んでいましたが、彼女が池上に住んでいたんですよ。でね、僕は大学1年の9月に、ハワイ大学へ留学してしまった。彼女には、他に好きな人がいるんじゃないかとか誤解されたまま離れ離れになってしまったんですね。しばらく文通して、翌年一時帰国で戻ってきました。戻って、彼女にちゃんとわかってもらおうと詩集を送りつけようとしたんですけど、まわりが止めるわけですよ、暗いと。彼女がヒグぞと。では、自然にわかってもらうにはなにか。それには歌だ、と。

―― 舞台は池上駅だったんですね。歌に出てくるフルーツショップなども実際にあるんですか?

佐藤 今はもうなくなって、ケンタッキーフライドチキンに変わっています。

―― 池上線も、もちろん実在。

佐藤 当時は、もうボロ電車で床が木で、すきま風がすごかった。でも、東京のローカル線という雰囲気は、今も昔も変わらない。

―― 池上の彼女とは、その後どうなりましたか?

佐藤 自然にわかってもらおうという作戦は、まんまと成功したと思います。当時それなりにヒットしましたんで。

「究極のベスト! 西島三重子」
ワーナーミュージック・ジャパン 1500円。
1曲目に「池上線」収録。
佐藤順英さんは、1975年作詞家デビュー。
東京音楽祭訳詩担当でもある。JASRAC 出0714024-701

―― で、彼女の反応は?

佐藤 うーん、どうだったんだろう。3、4年経って会ったんですよ。お嫁にも行かずに、実家の電話が通じたんで、会ってLPを渡したんです。そしたら「持ってるよ」って言われました。

―― ロマンチックですね。

佐藤 ほんとにあったことだからね。知らない人からはよく、不倫の歌とか言われましたけど、イメージとしては韓国の純愛の雰囲気なんです。だって今どき、白いハンカチを握り締めたりしないでしょ? でもこれは実話。そんなにずーっと話すこともないので、黙って立ってるってのも実話。池上線は駅と駅の間隔が短いからいくつ駅を過ぎたか、すぐわかんなくなっちゃう。だから「ごめん」ってあやまったりしていた。

―― 「池上線」というタイトルもいいですね。

佐藤 いいですけど、強すぎてね。イメージが先行して、作り手としては「池上線」をすごく邪魔に思ったこともあります。例えば、ド演歌を作りたくても作らせてもらえない。電車の歌を作れとか、「池上線」の続編を作れとか言われました。それもあって、「歌の舞台はどの駅ですか?」って聞かれても、今までは教えてあげなかったんです。心のなかにある駅です、なんて答えてね。